View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

東北大学機関リポジトリ
TOUR
Tohoku University Repository

ユーモアの機能 -南北戦争の歌「あの喇叭卒」と兵士たち-

著者	澤入　要仁
雑誌名	国際文化研究科論集
号	20
ページ	29-43
発行年	2012-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/55574

ユーモアの機能
―南北戦争の歌「あの喇叭卒」と兵士たち―

澤　入　要　仁

はじめに

1860 年 11 月 6 日、アメリカ大統領選挙一般投票がおこなわれた。奴隷制拡大に反対する勢力を集めて 6 年前に設立された共和党は、連邦下院議員エイブラハム･リンカンを擁立していた。一方、民主党は南北の候補を統一できず、北部から連邦上院議員スティーヴン・ダグラスが、南部から現職の副大統領ジョン・ブリキンリッジがそれぞれ出馬していた。さらにホイッグ党保守派の流れをくんだ新しい立憲連合党が元陸軍長官ジョン・ベルを担いでいて、侮れない存在だった。

一般投票の結果、リンカンが勝利を得たが、その得票率は 40% に届かなかった。ヴァージニア州とテネシー州をのぞく南部諸州はすべてブリキンリッジが平らげていた。しかしリンカンは、選挙人の多い北部のニューヨーク州やペンシルヴェニア州を制していたので、選挙人投票では 60% 近い得票率を得ることができた[1]。リンカンの快勝といえる。

その結果が明らかになるや、南部は奴隷制拡大が不可能になると見越し、すぐさま連邦を脱退していった。まずサウス・カロライナ州が連邦からの離脱を決議。つづけて低南部の六州（ミシシッピー、フロリダ、アラバマ、ジョージア、ルイジアナ、そしてテキサス）が連邦離脱に踏みきった。さらに大統領就任式の一ヶ月前には、それら七州の代表がアラバマ州モントゴメリーに集い、アメリカ連合国（いわゆる南部連合）を結成した。合衆国にならって、正副の大統領（大統領ジェファソン・デイヴィス、副大統領アレグザンダー・スティーヴンズ）を置き、連合国憲法をいただいた新しい連合国家だった。任期末の合衆国大統領ブキャナンは、南部の離脱を合衆国憲法違反とみなしたが、手をこまねいて静観するしかなかった。

1861 年 3 月 4 日、リンカンが第 16 代合衆国大統領に就任する。就任演説では、南部の奴隷制には不干渉であることを明言した。けれども連邦維持の意志を明確にするため、サウス・カロライナ州内にあった連邦軍のサムナー要塞に救援隊を派遣する。4 月 12 日、南軍はその救援を阻止せんと攻撃を開始。この砲撃によって、ほぼ丸四年におよぶ南北戦争が始まった。まもなくヴァージニアをはじめ四州（アーカンソー、ノース・カロライナ、テネシー）も連邦を離脱し、南部連合は 11 州に拡大した。

人口や経済力を比べれば、北部がまさっていることは明らかだった。けれども当初、戦局は南軍優勢に進んだ。たとえば、1861 年 7 月 21 日、ヴァージニア州北部で繰りひろげられた第一次ブル・ランの戦いで、南軍が大勝する。さらに大規模の戦闘が繰りひろげられた第二次ブル・ランの戦い（1862 年 8 月末）でも南軍は北軍を惨敗に至らしめた。北軍はヴァージニア州リッチモンドまでなかなか兵を進めることができなかったのである。

しかし、まもなく戦局は転回する。西部戦線を優勢に進めていた北軍は、1863 年 11 月末、テネシー州チャタヌーガを落とすことによって、深南部への入口を確保した。南軍も北部へ侵攻したものの、同年 7 月、ペンシルヴァニア州ゲティスバーグで死闘のすえ撃破された。翌 64 年 9 月には、大量の北軍がジョージア州アトランタを陥落させ、海岸部に向かって壊滅的進軍を敢行

する。こうして 1865 年 4 月 9 日、南軍は降伏し、南北戦争が終わった。

この南北戦争が大量の流血を招いた総力戦であったことはよく知られている。たとえば、戦時四年間に南北合わせて 62 万人以上の兵士が命を落とした。これは、アメリカが関わった、その他のあらゆる戦争の犠牲者の合計とほぼ等しい数字だった[2]。南部では、16 歳から 45 歳の白人男性人口が約 20% も減少した[3]。開戦当初、リンカンはこの戦争を「ひとつの国民の抗争」と呼んだが、それはむしろ、ふたつの地域間の死闘であった[4]。

それでは、この国の命運をゆるがす惨事は、どのような文学作品を生んだのだろうか。エドマンド･ウィルソンによれば､「南北戦争の時代は､文学が栄えた時代ではなかった。」ダニエル･アーロンは、南北戦争は「書かれなかった戦争」だった、という[5]。

たしかにウィルソンやアーロンがいうとおり、南北戦争は、ウォルト･ホイットマンの詩集『太鼓の響き』（1865）および『続・太鼓の響き』（同）のような例外を除いて、文学史上の傑作をほとんど生みださなかった[6]。南北戦争を描いた小説としてアメリカ文学史上に屹立するスティーヴン・クレインの『赤い武功章』は、戦後 30 年後の作品（1895）だった。しかも著者のクレインは戦後生まれ（1871）だった。南北戦争をめぐる物語として一般的にもっともよく知られている『風と共に去りぬ』に至っては、戦後 71 年後の作品（1936）だ。太平洋戦争にたとえれば、2016 年の作品に相当する。上記のウィルソンやアーロンの言葉には説得力があるといわざるをえない。

けれども近年、南北戦争が多くの大衆文学を生みだしていたことが明らかになってきた。たとえば､アリス･ファーズの研究『想像の南北戦争』（2001）によれば､「南北戦争は､< 書かれなかった戦争 > どころではなく､ほとんど研究されていない戦争関連文学の大奔流を引きおこしていた。……（それは）しばしば大衆的と呼ばれ軽視されてきた文学だ。[7]」じっさい、南北戦争時代は、ロマンス、児童文学、芝居、日記、パロディなど、各種の大衆文学を地方紙やパンフレットに生みだしていた。たとえば、戦後『ボロ着のディック』（1867）をはじめとした一連の少年向け成功物語で知られるようになるホレイショ・アルジャーは、1862 年、戦争短編物語を雑誌に発表することによってデビューしていた。その最初の長編小説は、銃後の少年の活躍を描いて戦中に発表した『フランクの軍事行動』（1864）だった[8]。

本稿では、ファーズにならって、南北戦争が生んだ大衆文学に目を向ける。とくに、従軍兵士が作ったユーモラスな歌「あの喇叭卒 ― ユパイディの歌」（“That Bugler, or the Upidee Song”）を取りあげたい。その理由は大きく三つに分けられる。

まず第一に、歌や詩が、戦争としばしばもっとも深く結びついてきた文学形態だったからである。古来、戦争をもっともえがいてきた文学形態は詩であり、それにもとづく歌であった。それは、詩人ホメロスがトロイ戦争を叙事詩『イリアス』（前 8 世紀）にうたった古代ギリシャの時代から変わらない。

詩や歌が戦争と結びついてきたのは、それらが単に古くからある文学形態だからではない。それらが口承で享受される文学形態だったからだ。口承と対極的ともいうべき､文字による伝達は､意識の集中を必要とする。そのためには静寂な環境があることも望ましい。けれども、それらはいずれも戦時という非常時には得がたいものである。対照的に口承は、進軍中の兵士でも、勤労奉仕中の市民も、容易に関わることができる。それは、祈りを捧げる行為や、讃美歌をうたう行為と似ていて、個人でも集団でも可能だ[9]。つまり、詩の口承性は戦時に有利な特徴なのである。

さらに、詩歌、とくに詩、が戦争と結びついてきたのは、それがもっとも公共的な文学だった

からである。それは、ひとりで読むことの多い小説とは対照的に、家庭の暖炉の回りや、さらに大きな集会の場で、詠まれるものだった。そのような大小の公共の場で詠まれることによって、詩は、人々の心を結びつけた。それはちょうど、教会の説教台で詠まれる聖書の一節が、会衆一同の心を結びつけるのと同じだった。

じっさい、詩には式典詩（occasional poetry）と呼ばれる種類がある。それは、式典に集まった人々の思いを再確認するための詩であった。たとえば、筆者はかつて、式典詩の名手ジェイムズ・ラッセル・ローウェルが、南北戦争で戦没したハーヴァードの卒業生たちを悼んだ「ハーヴァード終戦記念式典にて詠める賦」（1865）を論じたことがある[10]。戦時には、このような追悼会をはじめとして、演説会、出陣式、凱旋式など、集会の場が増えた。その結果、式典詩が詠まれる機会も多かった。詩と戦争は、これらの式典詩によっていっそう結びついたのである。

本稿で歌「あの喇叭卒」を取りあげる第二の理由は、この詩が上記のような式典詩ときわめて対照的だからである。たとえば、戦場から離れた典雅な会場でうたわれる式典詩とちがい、この歌は過酷な戦地で作られた。それは、奇抜なことをうたうことのできない式典詩とちがって、奇天烈で野卑なことをユーモラスにうたっていた[11]。さらに、人々を代表する詩人が演壇で高らかに詠んだ式典詩とちがい、無名の集団がメロディに合わせてうたうことによって享受された。このように、歌「あの喇叭卒」と式典詩との間の相違が大きいため、いっそう興味を誘うのである。

「あの喇叭卒」を論じる第三の理由は、その歌の詞が19世紀アメリカの国民的詩人ヘンリー・ワズワース・ロングフェローの詩「イクセルシオ」にもとづいているからだ。「イクセルシオ」は現在、嘲笑されることの多い作品であるが、かつては、ベストセラー詩人ロングフェローの詩の中でももっとも有名な作品のひとつだった。たとえば、ジャック・ロンドンの小説『マーティン・イーデン』（1909）のなかで、ロンドン自身を思わせる無学の若者イーデンさえ知っている数少ない詩が「イクセルシオ」だったことを思いおこせばいい[12]。この詩は、「イクセルシオ」という謎の言葉を唱えながら氷の山頂をめざす若者とその最期をうたっていた。わが道をゆくその若者の姿は、犠牲を顧みず理想を追い求める詩人の姿を思わせた。

なお、「あの喇叭卒」のメロディはじつは、19世紀中期にアメリカの大学で流行した戯(ざ)れ歌「ユパイディ」のメロディだった[13]。その戯れ歌がすでにロングフェローの詩「イクセルシオ」を利用していたのである。したがって、歌「あの喇叭卒」は、詩「イクセルシオ」の換作というよりも、むしろ歌「ユパイディ」の替え歌であるといった方がいい[14]。歌「あの喇叭卒」の副題が「ユパイディの歌」になっていることは、その由来を説きあかしている。

このメロディは、ほとんどが五音階（ド・レ・ミ・ソ・ラ）の音からできている。親しみやすいメロディだ。付点音符を使ったはずむリズムからはじまり、緩やかに下降したのち、第二小節で六度ジャンプし、続けて五度ジャンプする。陽気で軽やかに跳びはねながら丘をくだり、二本のせせらぎを跳びこえるかのようだ。屈託のない学生たちに人気があったのもうなづける。ただし、本稿ではこのメロディについては詳述しない。というのは、元来このメロディはドイツに由来すると思われるからだ。たとえば、「放浪学生」というタイトルでドイツの学生に親しまれていた[15]。ドイツの伝統的な学生歌や民謡を起源とするメロディのようだ。

ここで本論文の先行研究を紹介しておこう。「あの喇叭卒」を詳しく論じた研究は知られていない。わずかに、ヒープス兄弟による『うたう60年代』（1960）とE・ローレンス・エイベルの新しい研究『新国家をうたう』（2000）とが、喇叭卒をうたった歌の一例として言及しているにすぎない[16]。

けれども、南北戦争と大衆詩の関わりを扱った研究は、21 世紀になって増えてきた。すでに言及したファーズの研究『想像の南北戦争』（2001）がその代表である。ファーズはさまざまな大衆文学がこれまで知られていなかった南北戦争の側面を伝えていることを明らかにした。けれどもそのため残念ながら、ファーズの研究は詩に特化した研究になっていない。大衆詩に特化した研究は、本年末に刊行予定の、フェイス・バレットによる新しい研究『「声をあげて戦うことはとても勇ましい」』（2012）が嚆矢となるだろう [17]。バレットはすでに南北戦争をめぐる詩を集めた貴重なアンソロジー『「時局の言葉」』（2005）も編集している [18]。

南北戦争の歌に関する研究は、詩に関する研究よりも充実している。上述したヒープス兄弟の『うたう 60 年代』（1960）は、すでに古典的研究といっていい。2000 年には、同じく上述したエイベルの『新国家をうたう』が刊行された。本年には、クリスチァン・マクワーターによる『戦闘讃歌』も出版されている [19]。楽譜集も少なくない。125 曲を集めたアーウィン・シルバの『南北戦争の歌』（初版 1960）、アメリカ音楽研究の第一人者リチャード・クロフォードの編んだ『南北戦争歌集』（1977）などがある [20]。このように、歌については一次資料、二次資料とも豊富だ。本研究は、これらの大衆文学研究や大衆音楽研究を利用している。

以下に述べるように、本研究ではまず、「あの喇叭卒」の作者と出版について明らかになったことを、その調査のプロセスも含めて示す。というのは、まだ不明確な点も多いので、これまで何を使ってどこまで突きとめることができたのかを明らかにしたいからである。続いて、この歌のテクストを分析することによって、この歌の特徴と意義を詳らかにする。そして最後に、詩「イクセルシオ」と比較させることによって、笑いの背後に隠された、兵士たちの理念と覚悟を解明する。

「あの喇叭卒」の刊行

現在、歌「あの喇叭卒」の音源は比較的入手しやすい。というのは、フォーク・ソングやブルースなど、アメリカの古い音源を集めて発売していることで有名なスミソニアン・フォークウェイズが販売している CD『南北戦争歌名作集』（2011）に収められているからだ。（ただし、タイトルには「あの喇叭卒」の副題の一部「ユパイディ」が使われている。）スミソニアン・フォークウェイズの音源には古い録音も多いが、この CD の録音はそれほど古いものではない。もともと、フォーク歌手トム・グレイザーが 1973 年に録音してレコード化した音源である [21]。なお、スミソニアン・フォークウェイズというのは、あのスミソニアン博物館が運営する非営利のレーベルで、1987 年、フォークウェイズ・レコーズというレーベルから譲り受けた音源を母体にしてはじまった。

現在、「あの喇叭卒」の歌詞と楽譜も同様に入手しやすい。上述のグレイザー本人が楽譜集『南北戦争歌名作集』（1996）を出版しているからだ。そこには同じく「ユパイディ」というタイトルで、メロディとピアノ伴奏の楽譜が掲載されている。ただし、歌詞は、全七連のうち、五つの連しか示されていない。しかも、グレイザーが何に依拠してこの楽譜を印刷したのか、その典拠が不明である。著作権も、まるでグレイザー自身の新曲であるかのように、この楽譜集の出版社が保持している [22]。

それでは、このようなグレイザー編の形で流布している「あの喇叭卒」は、最初どのように発表されたのだろうか。

『あの喇叭卒』に関して確認しうるもっとも古い記録は、1866 年刊行のシートミュージックだ。

終戦の翌年のことである。ただし、このシートミュージックは稀覯書といっていい。アメリカ最大のシートミュージック・コレクションを誇るアメリカ議会図書館にも、同じく広範な収集で知られているジョンズ･ホプキンズ大学のレスター･S･レヴィ･コレクションにも収められていない。唯一、確認できたのは、サウス・カロライナ大学の音楽書特別コレクションのオンライン・カタログだ[23]。そこには、ニューヨークのJ・L・ピーターズから1866年に出版され、A・G・Knightが作詞、Armandが作曲した「あの喇叭卒 — ユパイディの歌」というシートミュージックがみえる[24]。

サウス・カロライナ大学のカタログにしか見いだせないというのは奇妙だ。そこで、さらに調べてみたところ、やはりその刊行の事実は傍証からも確認できた。まず第一に、全米20の音楽出版社が1870年までに刊行したシートミュージックのタイトルを集めた『シートミュージックと音楽作品の全カタログ』（1871）をひもといた。するとアーマンドが作曲し､ニューヨークのJ･L・ピーターズが出版した「あの喇叭卒」というタイトルがみえた[25]。

もうひとつ傍証がある。それはシートミュージックの表紙だ。19世紀アメリカのシートミュージックは、出版社内で表紙を共通化することが多かった。共通の表紙には販売中の歌曲の一覧が載せられていて、その中の一曲に目印をつけることによって、その印刷物の中身がわかる仕掛けになっていた。経費の節約と宣伝とを兼ねた工夫だった。アメリカ議会図書館の公演藝術閲覧室（Performing Arts Reading Room）が所蔵する、J・L・ピーターズ版のシートミュージックに､「南部回想」というシリーズがあり、その表紙に、“That Bugler!（U-pi-dee）” という曲がリストアップされていた。このことからも、この歌がJ・L・ピーターズから出版されていたことが推定できる[26]。

同時代のシートミュージックの表紙を調べてみると、さらに明らかになったことがある。それは、J・L・ピーターズ版以外のシートミュージックの表紙にも「あの喇叭卒」が記されていることだ。まず確認できた出版社は、ボストンの名門出版社オリヴァー・ディットソン社だ。同様の「南部回想」というシリーズの表紙に、「あの喇叭卒」があげられている[27]。同じく、ニューオリンズの出版者A・E・ブラックマーも、その「南部の戦争歌」シリーズ共通の表紙に、「あの喇叭卒」をあげていた[28]。つまり、年代の前後関係は不明ながら、少なくともニューヨーク、ボストン、そしてニューオリンズで、このシートミュージックが刊行されていたのである[29]。

「あの喇叭卒」の成立と作者

「あの喇叭卒」は、上記のジェイムズ・ラッセル・ローウェルのような高名な詩人の作品ではないので、その成立の経緯をすべて明らかにすることは難しい。けれども、これまで確認できたことを示しておきたい。

「あの喇叭卒」の成立については、従軍士官ウィリアム・ミラー・オーウェンが貴重な証言を残している。ニューオリンズで綿花の仲買人をつとめていたオーウェンは、1860年12月、「ワシントン砲兵隊」というニューオリンズの砲兵隊に加わり、開戦後まもなく、部隊長を補佐する副官（アジュタント）に任命される。その記録『ニューオリンズのワシントン砲兵隊の野営と戦闘』（1885）は、ワシントン砲兵隊の活躍だけでなく、南部兵士たちの従軍の様子を伝える記録として名高い。このオーウェンが､歌「ユパイディ」の成立を記録していたのである。それによると､「『ユパイディ』は古くからある大学生歌である。しかし、サビにはナイト曹長によって変更が加えられた。そして彼の作った詩はその曲に合わせて、1862年から63年の冬、ヴァージニア州キャロライン郡で、

最初にうたわれた」という[30]。このオーウェンの記録によって、この歌の成立年代、その作詞家、そしてその原曲が分かるのである。

オーウェンの証言が貴重なのは、そのような成立に関する情報だけでなく、この歌のうたわれかたについても示唆的だからだ。たとえば、1863年6月25日の様子である。砲兵隊は、死闘になることなどつゆ知らず、あのゲティスバーグへ向かって北上していた。途上、メリーランド州ウィリアムズポートでポトマック川を渡る。水の中を歩いて渡るため、靴とズボンを脱いで、下半身ほぼ丸裸になっていた。するとそのとき、向こう岸から若い女性の一団が輿に乗って渡ってきた。しかし、河の中とてどうすることもできない。勇猛で知られる砲兵隊の兵士たちも赤面するしかなかった。兵士たちは、その日、そろって「ユパイディ」をうたった。しかも、合衆国大統領のリンカンを「すっぱいリンゴの木」で絞首刑にしようという歌詞に替えてうたったという[31]。

このエピソードから二つのことが分かる。まず第一に、裸に近い下半身を若い女性に見られるような恥ずかしい体験をしたとき、砲兵隊が「あの喇叭卒」のようなユーモラスな歌をうたうことによって憂さを晴らしたことである。この歌の内容については後述するが、それは女性や川ごえとはまったく関係がない。けれども、このようなユーモラスな歌が、一日の忘れがたい思いを解消するためにふさわしかったのである。

第二に、「あの喇叭卒」は、時と場合に応じて、歌詞を自由に替えてうたわれたことがわかる。その時々の気分に応じて、随時、アドリブのように替えられてうたわれていたのである。そうすることによって、いっそう多様な場面で利用することができたのだろう。すでに述べたように、「あの喇叭卒」はそもそも「ユパイディ」という歌の替え歌であったが、さらに歌詞を替えてうたわれたのである。この日の場合、赤恥を忘れようとして、リンカンを処刑したいという、きわめて勇ましい詞になったにちがいない。

次に、オーウェンが「あの喇叭卒」の作詞者であるとするナイト曹長について調べてみた。ナイト曹長の名前は、この『ニューオリンズのワシントン砲兵隊の野営と戦闘』の補遺に収められた「名簿（ロール）」にも記載されている。すなわち、第二中隊の名簿に、「1862年、曹長 (First Sergeant)」として“Knight, A. G.”と記載されているのである。しかし、それだけであって、その正確なフルネームすら分からない[32]。

そこで、『南部兵士登録簿 1861–1865』（1996）を調べてみた。これは、『連合国兵士従軍記録総覧索引集成』という、全535リールのマイクロフィルムに収められた全従軍記録から作られた名簿である。それによると、第9巻にこの人物の名前が掲載されていた。すなわち、「ルイジアナ、ワシントン砲兵大隊、第二中隊、曹長」として、“Knight, Alfred G.” と記されているのである。まちがいなく、オーウェンのいうナイト曹長だ。これによってファーストネームがアルフレッドであることがわかった[33]。

さらに、『ルイジアナの連合国兵士および連合国部隊の記録』（1920）を調べた。すると、その第3巻第1編のなかに、この曹長の名前 “Knight, Alfred G.” を見いだすことができた。それによると、「兵卒、曹長、第二中隊、ワシントン砲兵大隊、ルイジアナ。1861年5月26日入隊、ルイジアナ州ニューオリンズ。1862年6月まで、全出席簿に在籍。（中略）イギリス生まれ、職業商人、住所ルイジアナ州ニューオリンズ、入隊時40歳、独身」とある。つまり、1820年あるいは1821年生まれのようだ[34]。

このようにして、姓名、生年、住所のおよそが分かれば、あとはオンライン・データベースを利用できる。（すなわち、これらの基本的情報が分からなければ利用できない。）歴史の浅いアメ

リカでは、自分の祖先を探る調査（genealogy）が盛んで、そのためのデータベースが作られているからだ。そこでもっとも網羅的と思われる ancestry.com を使ってみた。するとナイト曹長の名前が『合衆国連邦国勢調査死亡者目録』に記載されていることが分かった。この『目録』は、10 年ごとに実施される国勢調査の直前 12 ヶ月に死亡した人々の名前を集めた記録である。つまり、ナイト曹長はたまたま 1870 年に死んでいた。だからこの『目録』に記載されていたのである。それによると、「享年 51 歳、白人男性、イギリス生まれ、1870 年 2 月死亡、心臓病」という[35]。上述の『記録』と違って、1818 年あるいは 1819 年の生まれということになる。

さらに ancestry.com によると、現在、ルース・ドビンズ・ベネットという女性が、ナイトの墓についてインターネット上に記事を公開していることが分かった。その記事をみると、ナイトについて、これまで調べたどの資料よりも詳しく語っていて驚かされた。けれども、それは公的資料でもなく、刊行された著書でもないので、注意を要する。そこでベネット本人に問い合わせてみた。ベネットからの私信によると、ナイトは夫の「高祖父の兄」であるため、どの資料にも載っていない伝記的事実がわかるという。そのベネットによれば、ナイトのフルネームはアルフレッド・ジョージ・ナイトであって、1819 年 11 月 1 日、イギリス・ウィルトシャーに生まれた。1870 年 2 月 6 日、ニューオリンズのガーデン・ディストリクトにて他界。ニューオリンズではペンキ屋を共同経営していた、という[36]。

以上から明らかになったことをまとめれば、ニューオリンズでペンキ屋を営むイギリス出身のアルフレッド・ジョージ・ナイトが、曹長としてワシントン砲兵大隊第二中隊に従軍していた 1862 年末から 63 年初頭の冬、学生歌『ユパイディ』の替え歌『あの喇叭卒』を作った、ということである。この歌は，ペンキ屋の曹長が作詞した歌だったのである。ナイトは高等教育も文学的素養もなかったと思われる。ただユーモアのセンスは抜群だった。

それでは、作曲家として名前が挙げられていた Armand とは誰なのだろうか。サウス・カロライナ大学所蔵のシートミュージックでも、『シートミュージックと音楽作品の全カタログ』でも、作曲者は Armand とされていた。しかるに、前述のとおり、この歌は 19 世紀中期のアメリカの大学で流行した戯れ歌にもとづいている。そのメロディはドイツの伝統的なものと思われる。したがって、本来はアメリカ人の作曲者がいないはずだ。現代なら、Music: Traditional と明記されるだろう。

そこで、作詞者に続けて、この作曲者を調べてみた。すると、作詞者とちがい、この作曲者を調べることは容易だった。なぜなら、これは『あの喇叭卒』のシートミュージックをニューオリンズで刊行していた、前述の音楽出版者アーマンド・エドワード・ブラックマーのことだったからである。ブラックマーはしばしば自分のファーストネームをペンネームとしていたのである。

このブラックマーの名前は、たとえば、「アメリカン・グローヴ」と愛称されるすぐれた事典『新グローヴ・アメリカ音楽事典』にも掲載されている[37]。それらによると、ブラックマーは 1826 年、北部のヴァーモントに生まれた。大学卒業後、19 歳で南部へ渡ると、1888 年にこの世を去るまで、人生のほとんどを南部で暮らした。まず、アラバマ州やルイジアナ州で音楽教師をつとめた。1858 年、ミシシッピー州で音楽店経営に参画し、1860 年、ニューオリンズに移ると、そこで音楽出版や音楽店を営んだ。さらに，Armand や A. Noir というペンネームで作曲もおこなった。

南北戦争中、ブラックマーはニューオリンズのどの音楽出版者よりも数多くの戦争歌を出版した。たとえば、南部を代表する愛国歌『ディキシー』（1861）や、南部連合の旗のひとつ『ボニー・ブルー・フラッグ』（1861）、『メリーランド！ マイ・メリーランド！』（1862）を刊行していた。

そのため、1862 年、北軍がニューオリンズに攻め入ると、ブラックマーは、南軍の大義を拡大した罪で逮捕され、500 ドルの罰金を科された。拘留中、彼の店やその在庫は破壊されたが、釈放されるや、事業を再開した。このような南部を代表する音楽出版者が作曲者とされているのである。

このことから、いくつかのことが推定できる。まず、この歌が南部ニューオリンズの砲兵隊から生まれ、その作曲者が同じくニューオリンズのアーマンド（・エドワード・ブラックマー）とクレジットされていることを鑑みれば、このシートミュージックは、最初、南部のブラックマー自身が、1866 年かそれ以前に刊行したと思われる。つまり、北部ニューヨークの J･L･ピーターズやボストンのオリヴァー・ディットソン社は、戦後になって、その複製版を利用して印刷したか、表紙のみを替えて出版したか、そのどちらかだろう。南部の戦争音楽の出版を戦時下の重要な愛国的事業と考えていた南部がこの歌を出版せず、北部が先に出版したとは考えにくい [38]。さらに、戦後再建期の南部の混乱や、出版部数の少なさのため、ニューオリンズで刊行されたブラックマー版が残存していないに違いない。対照的に、メディア産業の中心地ニューヨークの出版者 J・L・ピーターズの版は、比較的残りやすかったのだろう。そのため、サウス・カロライナ大学図書館のカタログにピーターズ版が掲載されていると思われる。『シートミュージックと音楽作品の全カタログ』にブラックマー版が掲載されていないのは、ブラックマーがアメリカ合衆国音楽商業連盟に属していなかったからにすぎない。

『あの喇叭卒』のテクスト

ブラックマー版などのシートミュージックが『あの喇叭卒』のもっとも古い記録であるが、そのシートミュージックの刊行（ca. 1866）から、オーウェンによる記録が出版（1885）されるまでの過程で、『あの喇叭卒』の歌詞も出版されていた。それは、『アランのひとつ星バラード集』（1874）という、南部の愛国歌の詞を集めた代表的なソングスターだ。「ひとつ星」というのは、鮮やかな青地にひとつ星を描いた、南部連合国の非公式の国旗「ボニー・ブルー・フラッグ」に由来する [39]。ソングスターというのは、歌の歌詞を集めた詩集をさす。このソングスターに、『あの喇叭卒』の歌詞七連が掲載されているのである。

本研究では、この『アランのひとつ星バラード集』をテクストの典拠としたい [40]。なぜなら第一に、もっとも古いテクストであるシートミュージックが参照できず、この『バラード集』がそれについで古いこと。そして第二に、この『バラード集』は、南北戦争詩に関する、おそらく最初の博士論文（『南北戦争の南部の戦争詩』1918）を著したエスター・パーカー・エリンジャーも依拠するほど信用できるテクストと考えられるからである [41]。

That Bugler; or, the U-Pi-Dee Song	あの喇叭卒 ― ユパイディの歌
The shades of night were falling fast,	夜の帷（とばり）がせつなにおりてきた
tra-la-la-tra-la-la,	トゥラララ、トゥラララ
The bugler blew that well known blast,	喇叭卒が吹いた、言わずと知れたあの合図を
tra-la-la, la, la,	トゥラララ、ララ
No matter should it rain or snow,	雨が降ろうと、雪が降ろうと
Chorus—U-pi-de-i-de i-de, u-pi-de, u-pi-de,	（繰り返し）ユパイディイディ、ユパイディ、ユパイディ

U-pi-de-i-de i-de, u-pi-de-i-di,	ユパイディイディ、イディ、ユパイディイディ
U-pi-de-i-de-i-di, u-pi-de, u-pi-de-i-de-i-di.	ユパイディイディイディ、ユパイディ、ユパイディイディイディ

それでは第一連から紹介しよう。第一連は、ロングフェローの詩「イクセルシオ」の冒頭をそのまま借りた一行からはじまる。ロングフェローは、第一詩集を『夜の声』（1839）と題し、そこには「夜の讃歌」（1839）や「天使の足音」（1839）など、夜の訪れをうたった詩を収めていた。ロングフェローの得意なテーマである。かつて論じたように、「夜の帷（とばり）（夜の闇）」という表現はけっして斬新ではない[42]。けれども、二重母音の shades や night から、長母音の falling をへて、相対的に短く勢いのある母音を使った fast が弱強四歩格の強拍に並べられると、その語速に比例して、「夜の帷」が加速しながら降りてくるように感じられる。平易な表現でありながら、そこには巧みな技巧が使われていた。

夜や闇は、ド・フリースを引くまでもなく、死や悪、神秘を示唆する[43]。詩「イクセルシオ」でも歌「あの喇叭卒」でも、そのような夜が加速度的に深まるということは、読む者を不吉な世界へと引きよせる。じっさい、詩「イクセルシオ」では、悲愴な若者の壮烈で不可解な物語が続いていた。しかし歌「あの喇叭卒」ではちがう。そこでは、続いて「トゥラララ、トゥラララ」という、きわめて剽軽な間（あい）の手が入るのである。読者は調子が狂う。そして第一行の示唆どおりにはいかないことを悟るのである。

第二行以下を読めば明らかになるように、第一行の「夜の帷」は、死や悪の予兆ではないようだ。むしろ、それは静寂や休息の象徴になっている。しかるに喇叭卒が「言わずと知れたあの合図」を吹くのである。それが何の合図なのかは明示されていない。それは大きな問題ではないからだ。問題なのは、「あの」合図であることだ。この「あの」は、単なる指示形容詞ではない。そうではなく、何度も経験したものごとに対して、嫌悪の情を込めた「あの」なのである。第三行にもそのような感情の原因が示されている。「あの合図」が、雨でなろうと雪であろうと、どんなことがあろうと聞かされるからだ。

He saw, as in their bunks they lay,	寝台に兵士が寝ていると、
How soldiers spent the dawning day,	喇叭卒は知っていた、夜明けをどう過ごすのか
There's too much comfort there said he,	あれは快適すぎる、と彼はいった
And so I'll blow the "Reveille!"	だから私は吹く「起床喇叭」と。
In nice log huts he saw the light	かわいらしい丸太小屋に見える明かり
Of cabin fires warm and bright,	温かく明るい暖炉の火
The sight afforded him no heat,	その光景も彼を暖めることはない
And so he sounded the "Retreat!"	だから鳴らした「退却」と。

第二連以降は、各種の場面でいつも聞かされる喇叭の合図がうたわれている。まず第二連では、夜明けの「起床喇叭」である。兵士たちは、「快適」な「寝台」で寝ているところを、この喇叭によって叩きおこされるのである。興味ぶかいことに、第二連の第三行と四行は、喇叭卒の語りを直接話法で伝えている。これによって、熟睡している兵士たちと、意識の覚醒している喇叭卒との対比がいっそう明確になったといえるだろう。

第三連はふたたび、詩「イクセルシオ」を踏まえていると考えられる。「イクセルシオ」には、“In happy homes he saw the light / Of household fires gleam warn and bright”（「楽しき家々に見える炉火の灯り / 暖かく明るくきらめいていた」）とあった。原詩の“happy homes”を“nice log huts”に改め、“household fires”を“cabin fires”に替えている。原詩の方が“homes”や“household”という単語を使っていて、単なる家ではなく「家庭」というイメージを強調しているが、歌「あの喇叭卒」では、“huts”や“cabin”など、粗末な小屋であることを強調している。おそらくこれは、原詩のもつ少し高尚な気取りを避け、兵士たちにとって親しみやすい素朴な家々のイメージを使ったのだろう。かつて論じたように、女性詩人フィービー・ケアリーが、ロングフェローの詩「一日の終わり」のパロディを書いたときも、原詩のもつ気取りを地に墜としていた[44]。

Upon the fire he saw a pot	火の上にみえる鍋
Of sav’ry viands, smoking hot—	においたつ料理が熱い湯気をあげていた
Said he they shan’t enjoy that stew—	そのシチューを食べてはならぬと彼はいった
Then “Boots and Saddles” loudly blew.	そして高らかに吹いた「召集」と。
They scarcely their half-cooked meal begin,	生煮えの料理を食べ始めるやいなや
Ere Orderly cries out, “Fall in!”	伝令が叫ぶ「集まれ」と
Then off they march thro’ mud and rain,	そして泥と雨の中、進軍を始める
P’raps only to march back again.	逆戻りするだけになろうとも

第四段落では、食事の準備がほとんどできあがったところで、喇叭卒が「召集」の合図を吹く。兵士たちは、湯気の立つシチューを目(ま)の当たりにしながら、それらを食べることができない。ここまでくると、喇叭卒が生真面目なあまり、嗜虐的(サディスティック)になっていることがわかる。その分ますます兵士たちから恨みを買うのである。

第五連は、第四連と同様、食事時に関係している。ただし第四連とはちがって、兵士たちは生煮えの状態で食べなければならない。けれども、そこに伝令から指令が届くのである。ここには喇叭卒は登場しないが、兵士たちが、喇叭卒の合図だけでなく、各種の命令に辟易していることが明らかになる。しかも、自分たちの進軍が無益に終わるかもしれぬことを覚悟していることも示唆される。

But, Soldier, you were made to fight,	しかし兵士よ、戦わなければならぬ、
To starve all day, and watch all night,	昼には腹を空かし、夜には寝ずの番、
And should you have no bread and meat,	たとえパンや肉がなくても
That Bugler will not let you eat.	あの喇叭卒は食べさせてはくれぬ
O hasten then, that glorious day,	ならば、あの栄光の日をせきたてよ
When Buglers shall no longer play,	喇叭卒がもはや吹かないあの日を
When we, thro’ Peace, shall be set free	平和の中、解放されるあの日を
From “Tattoo,” “Taps,” and “Reveille!”	「帰営」「消灯」そして「退却」の喇叭から。

第六、七連は、十九世紀の詩の末尾にしばしば付加された教訓である。原詩の「イクセルシオ」にはこのような教訓はなかった。ロングフェローの詩では「村の鍛冶屋」(1840)に典型的な教訓が付せられている。その「村の鍛冶屋」では、末尾の教訓部分にいたると、鍛冶屋を「汝」や「わが尊き友」と呼びかけ、二人称を使っていた。この歌「あの喇叭卒」でも、「兵士」に呼びかけ、二人称を使っている。

しかも第六連では、兵士の任務として、戦うことや寝ずの番をつとめること、さらに空腹に耐えること、が確認される。それだけではなく、さらに最後の第七連では、喇叭卒の合図を聞かされる必要がなくなる「栄光の日」、すなわち勝利の日をめざそうという、愛国の兵士らしい結びで終わる。喇叭卒の合図に追われる毎日から逃げだしたいというのではなく、喇叭卒の合図が不必要になる日を待ちのぞんでいるところが、戦時下らしい戦意高揚の歌にもなっていることを示している。笑いと戦意とが巧みに結びつけられているのである。戯れ歌でありながら、単なる戯れ歌に終わっていないといえるだろう。

以上のようにテクストを分析すると、この詩の最大の特徴は、that という指示形容詞であることがわかる。第一連には、すでに指摘した"*that* well known blast"(言わずと知れたあの合図)という表現あった。第六、七連にはそれぞれ"*That* Bugler"、"*that* glorious day"とあった。いや、そもそも、この歌のタイトルが"*That* Bugler"だった。この that はどのような効果があるのだろうか。

まず第一に、それは、兵士たちの憤りが圧縮された言葉といえるだろう。この that は、単なる指示形容詞ではなく、「またあの……」という、度重なる経験をふまえた that なのである。そこには、繰り返しによって倍増された怒り、さらにはその怒りと裏腹に、何度も起こることによる、一種のあきらめの念も込められていると考えられる。

もうひとつ効果がある。それは、この that を使うことによって、同じ怒りやあきらめを共有する兵士たちの間に一体感が生まれることだ。that が向けられた事物に対して、同じ怒りを繰り返して抱くことによって、それは共通の敵になるからである。同じ敵をもつ仲間同士という一体感が兵士たちに生まれるのである。

すなわち、この喇叭卒やその合図は、兵士たちにとっての共通の敵になることによって、兵士たちの間の連帯を強化したのである。それは部隊としてのまとまりを生み、士気を高めることになるはずだ。すなわち、部隊にとって有利に働くのである。この喇叭卒やその合図は、単なる規律の実行者として部隊に貢献していたのではなく、兵士たちの怒りを買って連帯感を強めることによって、部隊の戦闘力を高めるという貢献をしていたのである。まことに図らざる皮肉な貢献だ。

この逆説は、すでにふれた、詩の末尾にある教訓にも示されている。兵士たちは、共通の敵である喇叭卒に追いたてられない「あの栄光の日」を求めるようになるのである。それは、「あの」といえば通じあう、兵士たち共通の願いだった。共通の敵によって共通の願いが生まれたのである。

おわりに

それでは、この歌をロングフェローの詩「イクセルシオ」と対比させて考えてみよう。前述したとおり、歌「あの喇叭卒」は、詩「イクセルシオ」にもとづく歌「ユパイディ」の替え歌だった。

『ユパイディ』のシートミュージックが発売された直後、『カレッジ・ソング・ブック』(1859)という歌集が刊行された。これはハーヴァード大学でうたわれていた歌を集めたもので、「ユパイディ」も収められているが、その「ユパイディ」について注記が付されていた。それによると、「ふ

つうこの曲に合わせてハーヴァードでうたわれるソロの部分は、地元の多くの人名をあげたりほのめかしたりしているので、ハーヴァードの学生以外には興味が持てないものになっている。それゆえ、ロングフェローのイクセルシオの有名な数連が、この歌のソロの部分に挿入されている」とある[45]。つまりこの歌は、時と場合に応じて、特定の同級生を揶揄したり、特定の教員を皮肉ったりした歌だった。つねに流動的な歌詞だったのである。そして、じっさいにうたう場合、最初や最後に、「イクセルシオ」の詩でうたったようだ。そうすることによって、はじまりやおわりの合図になるからである。それはちょうど、ジャズの演奏で、テーマ（主要な旋律）から始まり、各プレイヤーの自由なアドリブをへて、ふたたびテーマに戻って終わることと似ている。ジャズではテーマがいわばホームの役割をしていた。ロングフェローの原詩も同じだったように思われる。歌「ユパイディ」のなかで、この原詩はそのようなホームの役割を果たしたのだろう。誰もが知っている「イクセルシオ」はそのようなホームになる資格があったのである。

それでは、歌「あの喇叭卒」では、原詩「イクセルシオ」はどのような役割を果たしたのだろうか。まず指摘すべきことは、「ユパイディ」に比べ、「あの喇叭卒」では「イクセルシオ」を直接借りている部分が少ないことだ。すなわち、第一連の第一行と第三連の家庭のイメージが「イクセルシオ」と共通すること、および、回りから理解されぬまま仕事をひたすら遂行する喇叭卒の姿が「イクセルシオ」のなかの、回りから理解されない主人公と似通うことぐらいだ。「イクセルシオ」と書かれた若者の旗と喇叭卒の喇叭とが対応していることを加えてもいい。いずれにせよ、原詩との結びつきは深くない。

しかし、第七連と第八連でうたわれた教訓部分に至ると、詩「イクセルシオ」との重要な共通部分が浮かびあがってくる。原詩では、主人公の若者が、山頂に象徴される理想を求めて旅を続ける。その山は詩神の住むパルナソス山を思わせた。若者は、家庭や女性という慰みを振りきり、孤高として命を賭す。その結果、峠でひとり凍死することになるが、それでもその魂はさらに高いところへ上ろうとしていた。

歌「あの喇叭卒」でも、第七連にいたると、兵士たちの理想が明らかになる。それは、「あの栄光の日」という共通の理想である。表面上、それは、あの憎き喇叭卒からようやく解放される日である。それはさらに実質上、北軍を倒して勝利を収める日を意味していた。けれども同時にそれは、兵士として勇敢に戦死することによって獲得する、天国での平和な時間をも示唆していたと考えられる。というのは、読者の脳裏に「イクセルシオ」の若者の姿が思い浮かぶからである。犠牲をいとわず理想を追い求めた結果、命を落とす若者の姿が思いかえされるからである。

融通のきかない喇叭卒、という癪にさわる存在がユーモラスに描かれることによって覆い隠されてはいるが、じつはこの歌には、「イクセルシオ」の若者に似た悲壮感も込められているといえる。そして、この歌が作られてから約二年後、南軍が地にまみれ、苦しい再建期を味わったことを考えると、いっそう、この兵士たちの姿と「イクセルシオ」の若者の姿が重なりあうのである。歌「あの喇叭卒」が、詩「イクセルシオ」にもとづく歌「ユパイディ」を本歌取りしていたことはまことに正鵠を射た選択だった。冒頭の「夜の帷」という言葉を含んだ第一行を詩「イクセルシオ」からそのまま借りていることも、原詩のもつ暗さを引き継いでいるからだろう。歌「あの喇叭卒」も、詩「イクセルシオ」と同様の暗さを秘めているのである。ヒープス兄弟によれば、南北戦争の歌は他の戦争の歌に比べ、「深い真心」が特徴となっているというが、それはこの「あの喇叭卒」にも当てはまると考えられる[46]。

以上から明らかになるように、この歌の最大の魅力は、その二重性にあるといえる。すなわち、

まず、一見して明らかな全体的トーンがある。それは、嗜虐的なまでの喇叭卒の行動や、それに翻弄される兵士たちの苦悶がうみだすユーモアだ。しかもそれが、「あの」という指示形容詞によって、連帯感を作り出していた。さらに、そのようなユーモラスなトーンに隠された層があった。それは、詩「イクセルシオ」と共通する、兵士の悲壮な覚悟を秘めた層である。勇敢な兵士らしく、犠牲をいとわず理想を追いもとめる心理だ。その心理も、「あの」という指示形容詞によって、共有されていることが示されていた。このように、歌「あの喇叭卒」にはユーモアと悲壮という一見相反する二重性があって、それがこの歌に奥行きを与えているのである。

注釈

1　実際の選挙人投票は同年 12 月 5 日におこなわれた。しかし、選挙人団は一般投票によって選ばれるので、来たる選挙人投票の結果は、11 月 6 日の一般投票の結果によって明らかになる。

2　J. D. McClatchy, "Introduction" to *Poets of the Civil War,* ed. J. D. McClatchy (New York: The Library of America, 2005), p. xv.

3　Martin Griffin, *Ashes of the Mind: War and Memory in Northern Literature 1865–1900* (Amherst: University of Massachusetts Press, 2009), p. 3.

4　1861 年 7 月 4 日、リンカンは大統領教書のなかで、南北戦争を "a People's contest" と呼んだ。David Herbert Donald, *Lincoln* (New York: Simon and Schuster, 1995), p. 304.

5　Edmund Wilson, *Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War* (New York: Oxford University Press, 1966), p. ix; and Daniel Aaron, *The Unwritten War: American Writers and the Civil War* (New York: Knopf, 1973).

6　これらの二作はのち、『草の葉』第四版（1867）に統合された。

7　Alice Fahs, *The Imagined Civil War: Popular Literature of the North and South, 1861–1865* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2001), p. 1.

8　Ibid., p. 268.

9　口承や朗読については、澤入要仁「朗読の神話学 — 19 世紀アメリカの読書とその文化」『国際文化研究科論集』第 14 号（2006）57–71 頁参照。

10　式典詩については、澤入要仁「詩人になること・詩人であること — 19 世紀前半のアメリカ詩とその環境」『比較文學研究』第 95 号（2010）70–71 頁参照。

11　現在、南北戦争の歌というと、ジョージ・F・ルートの「自由の雄叫び」（1861）やジュリア・ウォード・ハウの「リパブリック讃歌」（1861）など、高尚な歌を想起するが、マクワーターがいうように、南北戦争の歌の多くはもっと「下品」だった。Christian McWhirter, *Battle Hymns: The Power and Popularity of Music in the Civil War* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2012), p. 4.

12　Jack London, *Martin Eden,* vol. 13 of *The Works of Jack London* (1909; Tokyo: Hon-no-Tomosha, 1989). なお、ロングフェローの詩「イクセルシオ」については、澤入要仁「上へ向かう謎の声 — ロングフェローの「イクセルシオ」を読む」『国際文化研究科論集』第 14 号、平成 18 年 12 月、73–88 頁を参照。

13　H. G. Spaulding, arranged, *Upidee: College Song and Chorus* (Boston: Oliver Ditson and Company, 1859).

14　19 世紀アメリカの歌には、替え歌が多かった。歌というものが、現在のように固定されていなかったのである。歌は流動的存在であり、完成形が存在しなかった。代表的な替え歌には、たとえば北軍の行進歌「ジョン・ブラウンの屍」を替えて、南北戦争を聖戦としてうたった歌「リパブリック讃歌」などがある。この流動性については、たとえば McWhirter, pp. 2–3 参照。なお、フランス革命前のパリで流行した諷刺歌を研究したロバート・ダーントンは、歌詞とメロディの流動性を「代替可能性」fungibility と呼んだ。Robert Darnton, *Poetry and the Police: Communication Networks in Eighteenth-Century Paris* (Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press, 2010), p. 89.

15　See, for instance, Peter Bauer, et al., "Studio auf einer Reis'," *Studentenlieder* (Diepholz, Germany: DA Music, n. d.) Compact disc. これは中世の遊歴書生（ゴリアルドゥス）をもじった戯れ歌である。

16　Willard A. Heaps and Porter W. Heaps, *The Singing Sixties* (Norman: University of Oklahoma Press, 1960), pp. 128–29;

and E. Lawrence Abel, *Singing the New Nation*（Mechanicsburg, Pennsylvania: Stackpole Books, 2000）, pp. 150–51, 289–90.

17　Faith Barrett, "*To Fight Aloud Is Very Brave*"（Amherst: University of Massachusetts Press, 2012）. ちなみに、このタイトルは、「声をあげて戦うことはとても勇ましい」と始まるエミリー・ディキンソンの詩（c. 1859）に由来する。

18　Faith Barrett and Christanne Miller, ed., "*Words for the Hour*"（Amherst: University of Massachusetts, 2005）. このタイトルは、ジュリア・ウォード・ハウの詩集『時局の言葉』（1857）にもとづく。

19　Christian McWhirter, *Battle Hymns: The Power and Popularity of Music in the Civil War*（Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2012）.

20　Irwin Silber, ed., *Songs of the Civil War*（1960; New York: Dover Publications, 1995）; and Richard Crawford, ed., *The Civil War Songbook*（New York: Dover Publications, 1977）. このうち、クロフォード編の楽譜集は、19 世紀のシートミュージックのファクシミリ版を集めたものである。

21　Tom Glazer, *A Treasury of Civil War Songs*（1973; Washington: Smithsonian Folkways Recordings, 2011）, Compact disc.

22　Tom Glazer, ed., *A Treasury of Civil War Songs*（Milwaukee: Hal Leonard Corporation, 1996）, pp. 42–43. この楽譜集が刊行されたのは、グレイザーの 1973 年の音源が、上記のスミソニアン・フォークウェイズによって再発売される以前の 1993 年に、ソングズ・ミュージック社によって再発売されていたときのことだった。Tom Glazer, *A Treasury of Civil War Songs*（1973; Scarborough, NY: Songs Music, 1993）, Compact disc.

23　University of South Carolina Libraries, "19th-Century Bound Musical Prints" <http://library.sc.edu/music/bmp_cl.html>（1 October 2012）.

24　Armand, *That Bugler or the Upidee Song,* words by A. G. Knight（New York: J. L. Peters, 1866）. このシートミュージックは未見。

25　Board of Music Trade of the United States of America, ed., *Complete Catalogue of Sheet Music and Musical Works*（1871; New York: Da Capo Press, 1973）, p. 128. 全米の 20 社とは、このアメリカ合衆国音楽商業連盟に属している 20 社である。

26　See, for example, C. F. Yagle, *Alabama Gorlitza*（New York: John L. Peters, n. d.）, n. p. ただし、これらの表紙から出版年を確定することはできない。

27　See, for instance, Harry Macarthy, *The Bonnie Blue Flag*（Boston: Oliver Ditson & Company, n. d.）, n. p. この表紙にタイトルが示された同社版の『あの喇叭卒』はやはり未見であるが、その譜面には歌集『我らが軍歌—北部と南部』（1887）に転載されている。この歌集にみえる「あの喇叭卒」の楽譜が、現在確認できる最古の楽譜である。A. E. Blackmar, "That Bugler! or the Upidee Song" in *Our War Songs, North and South*（Cleveland: S. Brainards' Sons, 1887）, pp. 583–85.

28　See, for example, Ducie Diamonds, *The Gallant Girl*（New Orleans: A. E. Blackmar, n. d.）, n. p.

29　なお、同じ歌曲が、複数の出版社から刊行されること自体は珍しいことではない。とくに、北部では音楽出版社が提携を結んでいて、提携各社が同じ歌曲をしばしば同時に出版していた。See, for instance, Heaps and Heaps, pp. 7–8.

30　William Miller Owen, *In Camp and Battle with Washington Artillery of New Orleans*（1885; Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1999）, p. 435. なお、オーウェンの記録のなかに、この歌の言及があることは、上記のエイベル『新国家をうたう』によって知った。Abel, p. 326.

31　この「すっぱいリンゴの木」というのは、南北戦争時の北軍の行進曲として名高い歌「ジョン・ブラウンの屍」のなかに、連合国大統領ジェフ・デイヴィスを「すっぱいリンゴの木」で絞首刑にしようという詞があったことを踏まえている。

32　Ibid., p. 443.

33　Janet B. Hewett, ed., *The Roster of Confederate Soldiers 1861–1865*（Wilmington, NC: Broadfoot Publishing Company, 1996）, 9: 227.

34　Andrew B. Booth, comp., *Records of Louisiana Confederate Soldiers and Louisiana Confederate Commands*（1920; Spartanburg, SC: The Reprint Company, 1984）, 3: 585.

35　*Federal Mortality Census Schedules, 1850–1880 (formerly in the custody of the Daughters of the American Revolution) and Related Indexes,* microfilm T655, roll 23（Washington: The U. S. National Archives and Records Administration, n. d.）,

p. 250a.

36　Ruth Dobbins Bennett to author, 4 October 2012; Ruth Dobbins Bennett, "Alfred George Knight," *Find a Grave,* September 2006 < http://www.findagrave.com/cgi-bin/fg.cgi?page= gr&GRid=15939700> 4 October 2012. なお、本稿の校正中、ニューオリンズ公共図書館にて、地元新聞二紙に掲載されたナイトの短い死亡記事を確認することができた。それらによると、ナイトは 1870 年 2 月 6 日夕方 4 時半に死亡。享年 52 歳。イギリス生まれで、アメリカ在住 38 年という。"Died," *The Daily Picayune,* 8 February 1870, p. 6; and "Died" *New Orleans Commercial Bulletin,* 7 February 1870, p. 1.

37　ブラックマーの伝記は、たとえば、John H. Baron, "Blackmar, A（rmand） E（dward）," in *The New Grove Dictionary of American Music,* ed. H. Wiley Hitchcock and Stanley Sadie（1986; London: Macmillan Reference Library, 1997）, 1: 226–27; W. S. B. Mathews, ed., *A Hundred Years of Music in America*（1889; New York: AMS Press, 1970）, p. 78; and Abel, pp. 264–67, 289–90 などを参照。

38　南部が戦争音楽の出版を重視していたことは、Abel, pp. xvi–xvii を参照。

39　公式の国旗は、七つ星の「スターズ・アンド・バーズ」などがある。

40　A. G. Knight, "That Bugler; or, the U-Pi-Dee Song," in *Allan's Lone Star Ballads: A Collection of Southern Patriotic Songs Made During Confederate Times,* comp. Francis D. Allan（Galveston, Texas: J. D. Sawyer, 1874）, pp. 144–45.

41　エリンジャーは、博士論文の巻末に、「目録」として、参照しうる戦争詩のタイトルを掲げたが、「あの喇叭卒」に関しては、『アランのひとつ星バラード集』を典拠としていた。Esther Parker Ellinger, *The Southern War Poetry of the Civil War*（Hershey, PA: The Hershey Press, 1918）, p. 170. なお、エリンジャー論文の主査は、アメリカ文学研究黎明期を代表する研究者アーサー・ホブソン・クインだった。Ellinger, "Forward" to *The Southern War Poetry of the Civil War*（Hershey, PA: The Hershey Press, 1918）, n. p.

42　澤入、「上へ向かう謎の声 ― ロングフェローの「イクセルシオ」を読む」79 頁参照。

43　See Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery,* 2nd rev. ed.（Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1976）, pp. 129, 341–42.

44　澤入要仁「自己主張するパロディ ― フィービー・ケアリーとその作品」『国際文化研究科論集』第 11 号、平成 15 年 12 月、15–28 頁。

45　C. Wistar Stevens, ed., *College Song Book*（Boston: Henry Tolman and Company, 1859）, p. 20.

46　Heaps and Heaps, p. 6.